

樹木と絵画の交差点

第5回 ～伊藤若冲とボタン～

伊藤若冲（1716-1800）は、江戸時代中期の画家です。画面いっぱいに13羽の鶏を埋め尽くすようにして描かれた「動植 綵絵 群鶏図」が有名です。「奇想の画家」と呼ばれ、鑑賞者に鮮烈な印象を与える若冲作品ですが、特にこの作品は羽一枚一枚を丹念にびっしりと描き込んだ緻密な描写や、原色のまま彩色された濃くて鮮やかな色彩、そして画面のすみずみにまでピントが合っているような濃密な空間にめまいを覚えるほどです。

若冲は京都の老舗青物問屋の長男として生まれ、家業のかたわら狩野派の絵師に学び、40歳で弟に家督を譲って画業に専念しました。山水画や人物画のような伝統的な画題を避けて、鶏、植物、虫や魚、野菜などの身近なモチーフを描きました。使用する画材にも相当のこだわりを持ち、例えば、より良い藍色（紺青）を出すため



に、プロシア（ドイツ）で発見されたばかりのプルシアンブルーも使っていたようです。日本では「ベロ藍」とも呼ばれるこの人工顔料は、オランダ～出島経由で輸入され、その美しい透明感から葛飾北斎など江戸後期の浮世絵師たちに好まれました。浮世絵師たちに先駆けて、今のところ日本では若冲が最も早くプルシアンブルーを使用したとされます。

近年にわかに若冲人気が高まっていますが、その人気の理由は、鋭く自然を捉える真剣な眼差しと同時に存在する若冲の遊び心にあるのかもしれませんが。

伊藤若冲（1716-1800）

「動植綵絵 群鶏図」（部分）（18世紀後半）宮内庁三の丸尚蔵館蔵
旧来にとらわれない大胆な構図や独創的な技法に挑み、独自の画境を展開した。「私の絵の価値がわかる人を千年待とう」と語った。

ボタンのアラベスク



若冲の代表作「動植綵絵」は“動物と植物を題材にした彩色画”という意味で、若冲が10年の歳月を注ぎ込んで描きあげた連作です。全部で30幅あり、「釈迦三尊図」の3幅を飾るために描かれ、一揃いで相国寺に寄進されました。

八重の華やかなボタンの花びらが重なって、画面に埋め尽くされています。若冲の持ち味である独特なうねる画面空間にボタンの華やかな花卉の曲線がマッチして独特の濃密な雰囲気があります。

描写には工夫を凝らし、花卉のふちの輪郭を濃く描いて陰影をつけたり、白色で花卉を描いて下地の色を残して見せたりと、様々な方法で花卉を描いています。

「牡丹小禽図」とありますが、小禽はボタンに埋もれて目立たず、注意を凝らさないと見つけれないほど。あくまでボタンが主役の画面です。

「動植綵絵 牡丹小禽図」（18世紀後半）宮内庁三の丸尚蔵館蔵



「動植綵絵 雪中錦鶏図」(18世紀後半) 宮内庁三の丸尚蔵館蔵

雪の中の錦鶏とボタンとマツを描いています。ボタンの種類は冬咲きの寒ボタンでしょうか。

樹木に降り積もる雪の描写が独特です。粘って固まっているような、雪の表現としてはあまり見かけない描写です。しかしながら、しばらく見ていると、降ってから少し経って溶けかかった雪はこんな形をしていたような…という記憶を思い起こさせます。若冲は誰も絵にしたことがなかった瞬間を見事に視覚化して描写しています。モチーフはぼたん雪(ぼた雪)とボタンをかけた洒落でしょうか? 絵の中で思いもよらない遊び心を見せる若冲だけに、ついそんな想像をしてしまいます。

ボタンについて



ボタン開花の様子
撮影場所: 上野東照宮ぼたん苑
(東京都台東区)

ボタン (*Paeonia suffruticosa*) はボタン科ボタン属の落葉小低木、原産は中国西北部です。中国ではもともと薬用植物で、根の皮の部分を生薬として用いてきました。やがて花が観賞の対象にされるようになってからは、その絢爛豪華な花容から「百花の王」と呼ばれています。財産や富貴などを象徴し、縁起が良い花とされています。文様や家紋としても人気が高く、人々に広く親しまれてきました。

日本には奈良時代に伝来したとされ、宮廷や寺院を中心に栽培されました。庶民の園芸文化が花開いた江戸時代には多くの品種が生み出

され、さらに人気が高まりました。

1897年、世界中でジャポニズム(日本趣味)が流行した頃にアメリカで出版された日本文化を紹介する写真集「Japan, Described and Illustrated by the Japanese」では、牡丹園の写真とともに(左図版)、次のように記しています。

「牡丹園。4月の終わりから5月の初めの間の牡丹の花盛り…中略…全住民はある種の花で有名な場所を訪れに出かけ、宗教熱に似通う熱狂的な賞賛を表す」

江戸時代に始まったボタン人気は、明治半ばの当時の人々をも夢中にさせていたようです。



「Japan, Described and Illustrated by the Japanese VOL.VI」より
(1897年刊行) 国際日本文化研究センター蔵

«引用文献»

Francis Brinkley 編著「Japan, Described and Illustrated by the Japanese VOL.VI」J.B.Millet 社 1897 年

«参考文献»

小林忠「伊藤若冲」新潮社 1996 年（新潮日本美術文庫）

日本色彩学会編「色彩用語辞典」東京大学出版会 2003 年

«参考 URL»

上野東照宮ぼたん苑 ホームページ

<https://uenobotanen.com/>（参照 2022-7-16）

«画像提供»

大学共同利用機関法人 国際日本文化研究センター